

文学と思想の命運(1)昭和文学の一動向

TATEISHI, Haku / 立石, 伯

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

32

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

76

(発行年 / Year)

1985-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019433>

文学と思想の命運(一)

— 昭和文学の一動向 —

(一) 黒井千次論

黒井千次の昨年まとめられた『群棲』は、現代の都会生活者の危機や不安のありようを鋭く浮彫りにしえていて、すぐれた達成を示している。実存の奥深い闇や現実をさまざまな角度から凝視しようとする黒井千次の作家としての眼や手腕が、近年とみに研ぎ澄まされていくことを感じさせるに十分な懐深い作品である。つまり、ここには現代の人間の肉体・精神の底にひそんでいる欲望、失望、喜び、希望、恐れ、無力、欠如などが印象的に表現されていて、人間や文学、ひいては現代そのものを批判的に検討するのに十分堪えうるすぐれた作品だといえるのである。谷崎賞受賞もけだし当然で、これをきっかけにさらに文学的考察が深さとひろがりをもつようになるのを願うものである。

立 石 伯

私は、これから『群棲』や黒井千次の全体像を解き明かそうとするのではない。つまり、「青い工場」(昭和三三年)、「二つの夜」(三八年)などの初期作品、「聖産業週間」(四三年)、「時間」(四四年)、『五月巡歴』(五二年)、『群棲』(五九年)などを総体的に組上にのせて、黒井千次の作品・作家像を追尋する意図はもっていないのである。私のささやかな目論見はといえば、昭和四〇年代以降のその作品群に目を注ぐことによって、人間と思想の微妙な変化、あるいは激しい転変の様態を剔抉することである。それは、諸作品の作中人物たちの意識内部における時間と空間の生成のありようや生活や関係意識の変化を対象化しつつ、そこに内在する意味と価値を素描することにほかならない。

前もって、私の構想の大概を示して、今後の展開の方向と深めるべき主題的なものを確認する方が親切であろう。私はかつて昭和文学と思想の足取りの一側面を、文学思想の多様な展開や転向文学論によって闡明しようと考えたことがあったけれども、今年で六〇年を越す昭和文学の流れの一面を概観するのに、そのようなモチーフでは一側面はおろか、ほんの一小局面しか把握できないのではないかと、思うようになった。転向という概念一つをとってみても、現在「転向」という言葉は死語に近いだろう。というよりも、古典的な転向概念と相当異なった位相で「転向」について考えなければならなくなっている。本多秋五や思想の科学研究会の共同研究で提出された転向概念はそれなりの有効性をもっているが、たとえば、狭義の転向についての考え方はほとんど現実性をもちえず、新左翼系の誌紙に命脈を保っている程度である。

現在、一般的に「転向」を考える場合、本多秋五、思想の科学研究会、小田切秀雄、吉本隆明、磯田光一、菅谷規矩雄などの転向論で十分網羅できる。だが、それらではどうしても汲みあげえない局面に逢着する。それは黒井千次や磯田光一などが提示した八高度成長期に進行した脱イデオロギー現象Vと関係づけられる要素をもっている。私は戦前の場合をあとまわしにして、敗戦以降の転向の特徴的な要素のいくらかを諸作家に於て見ることによって、文学と思想の変化の内実を探っていくつもりだが、どの程度人間や文学や思想の奥深い真実に到り着きうるか不明である。ともあれ、大体つきのような時期を軸として考えることになると思う。一、敗戦後の数年間。二、日本共産党五〇年分裂前後から血のメーデーの頃。三、

五六年度のスターリン批判とボズナニ、ブダペストの動乱前後。四、六〇年から七〇年の安保闘争の頃——である。これらの諸時期の設定は、きわめて状況論的なものにすぎないといえる。にもかかわらず、これらの社会・政治的状况との緊密な関係に於て、いくらかのすぐれた作品は、あるいは失敗することによって作品と思想の意味を発きだしている作品は、かなりの深度で本質的な位相に垂鉛を下している。そのため、状況を越え、現実を越えたレベルで論じることができるとし、私たちは文学独自の感性と思考が生動している表現に行き当りうるはずなのである。

私の解明すべき課題は転向文学論ではないが、相当転向の問題と交錯するので、論の展開上、誤解を生ずるおそれのないよう、転向論の基準となっている諸考察を一瞥しておきたい。本多秋五は周知のごとく転向をつぎの三種に分類した。「第一は、共産主義者の共産主義拋棄を意味する転向で、これはいわば小括弧にくくられる転向である。第二は、加藤弘之も森鷗外も徳富蘇峰も転向者であったという場合の、一般に進歩的合理主義的思想の拋棄を意味する転向である。(中略)最後の、いわば大括弧にくくられる転向は、もつとひろく、思想的回転(回心)現象一般をさす。」(「転向文学論」)本多秋五のよく考えぬかれた転向概念に対して、吉本隆明は別のモチーフから肉迫してつぎのように主張した。転向は「日本の近代社会の構造を、総体のヴィジョンとしてつかまえそなえたために、インテリゲンチヤの間におこった思考変換をさしている。」(「転向論」)あるいは、「マチウ書試論」も参照できるだろう。さらに思想の科学研究会の共同研究『転向』三巻では原理的に語りつくされ

ているが、私はかつて今少しく異なった転向のかたちを埴谷雄高の転向過程のうちに見た。その大概はより深めつつのちに結論的に提出するつもりだが、昭和四〇年代初期までのすぐれた転向観として磯田光一の「イデオロギーのヴェクトルのいかんにかかわらず、政治における理想主義のたどる日本的な宿命を、可能なかぎり意識化しよう」と試みた」という『比較転向論序説』と、本多秋五の分類に従えば中括弧にくくられる転向についての考え方から、「舞姫」にはじまり吉本隆明までをあつかった、松原新一の『転向の論理』など十分高く評価できるだろう。

こうした文学・思想の側面ではなく、より政治主義、イデオロギイ的側面から発想された転向論に、ある位置と位置の間に権力との関係に於て線をひいてそれを越えるか否かで転向を判断する塩見鮮一郎の考えや、この考えの延長線上で高度成長に起因する戦後市民社会の成熟と完成に転向の契機を見た高野庸一の考えもある。けれども、私にとって煥発的な発想は、その立論の根拠も方向性も、また結論も少しく異なるが、菅谷規矩雄の「亡命と銃撃の暗部」である。彼は「戦後思想としてのわたしたちにはほとんど自明のものとしておかれている前提は、たとえどこをそのゆく手にさだめるにしてもまた途をうしなうにしろ、必然的に△転向▽が不可能である歴史性のなかにとこまでも思想の領域はひろがっているという事実」を強調し、転向が不可能だという意は、吉本隆明の定式化した二段階転向過程を急進性へと逆転する論理を得ること、また支配的な戦後思想が例外なく転向の産物であることを確認しそれを転倒することだと把握した点にある。彼はしたがって埴谷雄高に△転向▽思想の極

北を設定する。「それが極北であるのは、もはや△政治▽というカテゴリーがそのさきには存在しえない地点にまでじんの△体験▽が問いつめられているからだ」と。さらに磯田光一は、「転向の帰趨」で、転向は旧左翼的な倫理の問題ではなく、「いまや『転向』の問題は、巨視的には『共同体の神話学』というべき問題領域を無視してはほとんど解けなくなっている」と示唆的な見解を提示している。菅谷と磯田の見解はよく吟味してみるべきもので、私のモチーフと直接交差しないけれども、何かの折に触れることになるはずである。

こうした諸種の転向論を素描してみると、黒井千次の深切な読者の多くは、私がなぜ黒井千次から説きおこそうとしているか、不審に思うにちがいない。当然の疑念だ。この不審の念をはらうために一口でまずいっておけば、「時間」、『五月巡歴』から『群棲』までの足取りのうちに、一九五〇年代後半から現在にいたる「転向」の一特徴というべき典型的な△変化▽の相が垣間見うるからにほかならない。端的にいえば、それ以前の「転向」をあつかった諸作品に見られたように、政治組織（あるいは前衛党組織）や政治思想などが、作中人物たちの思考転換の有力な引金になっていない点を指摘できる。党やイデオロギイが支配力を失い、相対化されている点に第一の特徴を見うるだろう。第二に、日本の経済・社会構造の歴史的变化が、労働現場や会社を舞台として具体的、広範なかたちで表現世界にとりこまれることで、労働の意味や組合運動の現実などが暗示的に照らしだされていること。第三に、古典的な転向経過にみられるような組織への忠誠心、社会主義思想に対するコンプレック

スが稀薄になっていること。したがって、イデオロギイ絶対視にかかわる倫理意識や道徳観や狂信的思いこみによって個人の行為や思想が断罪ないしは排斥されにくくなっていること。第四に、革命だとか平和だとか、正義だとか善だとか口にしても、その本質的な立脚点や虚偽が見抜かれ、容易に相対化される状態にあること。第五に、個人の内面をささえる時間と空間意識の問題が、ある個人の生の変容の軌跡として対象化されることによって、単に「転向」という観念をこえて、ひとりの人間の感受性と変容の相が深みからすくいあげられるようになっていくこと。もとより、黒井千次の作品で、これらがすべて自覚的、意識的に表現され、高度な達成を示しているというのではない。明晰な表現と不十分な考察のむこう側に、右のような諸点が判読されるというのである。

私は、まず「生活」意識を考えてみようと思う。この場合、戦前の島木健作の『再建』（昭和十二年）『生活の探究』前編（同年）を念頭におけば、差異が明白になるはずである。もとより、この章で島木論を展開する紙幅がないので『再建』の核心のみを記すに止めたい。作品の時代的背景は、昭和八年前後を中心とするが、三年にK県の農民組合組織が弾圧によって崩壊し、その後の苦難の数年間を堪えた作中人物たちの諸相が点綴された。獄中で非転向をつらぬく浅井、すぐれた女性運動家・春乃の組織再建のもくろみ、改良主義的な考えの実力派・谷川をはじめとする農民たちの国会総選挙をきっかけとする諸動向が、たとえば前衛組織と大衆団体、農民闘争のありよう、反戦主義や農本主義の問題、さらには中澤、東條（佐野、鍋山）の獄中転向をからめた広範で解きにくい文学・思想

上の問題が考察されている。視点を転向の問題とからめた「生活」に局限してみたとき、つぎの二つの側面を見落しがたい。

浅井は、中澤、東條の転向声明をよみ、激しい動揺を感じてこうのべた。彼らの意見は陳腐だ。「それはその唱道者である中澤、東條の名の故にはじめて衝動的だった。三一年の秋の満洲事變があつて以後の時期に、中澤、東條によつて新しくそれが唱へられた、といふところに特別重要な意義があつた」と。ここでは、佐野、鍋山の転向論史的意味づけも、その内容の批判にもわたらない。浅井の感想を記すにとめる。「ある點は脆いが、ある點は急所を衝いてゐないとは言へぬ。（改行）しかしながら彼は決定的なことは何一つ言へぬと思ふのだ。それを言ふことは軽率であり、差し控へねばならぬと思ふのだ」と。彼は社会の動きから六年も引きはなされ、△窮極の所に於て捉へることが難しいと思つたのである。この思いに對しても、多くの注釈や批判が可能だ。だが、この作品の文脈が説き明かす、つぎの重病におちいつた折の生の激しい欲求の部分を引用しておこう。

「するとこの時今まで彼の内に押しひしがれてゐた闘志が猛然として甦つて来た。（生きたい！ どうあつても生きぬかねばならぬ！）と彼は全身のエネルギーを搾り出すやうな聲で心に叫んだ。あらゆる理窟が何だ。それが今のおれに何になる。おれはただ生きたい。どうあつても生きたい。この人間の世界を思ひ、あらゆるおれが考へただけで爲残して来たものの事を思へば、そして今抱負として胸に抱いてゐるものの事を思へば、何としても今ここに死んでは居られぬ。彼は必死にその事を思ひ續けた。」

この叫びは心底からの悲痛な叫びである。魂の一つの真実の声だと擁護したいほどだ。けれども、中澤、東條の転向声明に対する感想とこの激しい生の欲求は表裏一体のものであり、日本的転向の典型を示すようになるのである。本多秋五なら「可能性の誘惑」というだろう。ドストエフスキイなら、思想転換を人民衆の発見として積極的に倒立させるだろう。浅井が「あらゆる理窟が何だ」と呻きだすとき、「癩」の主人公の極度に理想的な倫理的転向を否定した『生活の探究』の杉野の帰農と大衆追従への傾斜はほぼ地つづきの道筋だといえるだろう。私は結果論としていっているわけではないのだ。杉野の生活意識は、その象徴的ともいえる生活の探究にもかわらず、可能な生活ではなくその時代と現実が要求したもの、あるいは思想と実践上の後退戦をたたかうようにみえながら帰農への埋没といっても過言ではなかったからだ。

黒井千次の作中人物たちの「生活」は、島木健作のそれとは異なっている。とはいえ、昭和四〇年代における可能な生活の探究が十分なされたか否かにわかに断じがたい。もちろん、生活の幅や厚みは、単一なものさしで測りうるものでない。生活の概念そのものが多様である。

平野謙は「島木健作」で、「転向現象のおもな原因が、検挙、拷問、投獄というような外的強制にあることは論を俟たぬが、革命運動の現実主義的批判がまた転向現象のひとつの重要な温床をなしているのだ」と明快に断じたが、論証ぬきにいつてしまえば、「革命運動の現実主義的批判」が文学的、理論的、現実的に力をもたらしたものは戦後派文学者たち、とくに埴谷雄高、椎名麟三、野間宏、

武田泰淳、石上玄一郎、あるいは田中英光、「近代文学」の同人たちの苦闘を措いて語れない。椎名麟三は、「思想なんかせいせい便所の落し紙になるくらゐなもんだ」（『深夜の酒宴』）、「唯物史観が僕の胃痙攣に何の役にもたなかつた」（『深尾正治の手記』）と卓拔な反語とユーモアを駆使して、独特な生活意識について語ることができた。つまり、彼の作中人物たちにあつては、生活すること、生きることが革命であつた。また、自由を真にもとめるたたかいである日常性のうちに真の生活があるとみなされていた。こうした生活意識の内在的転化をそれ以降の作家たちは十分活用することができた。言葉をかえれば、転向概念の高度な転換の上に、自分たちの生活と文学を確立できる契機が提出されていたということが出来る。いうまでもなく、この延長上で、文学、生活、革命を維持・発展させることは至難な業にはかならないにしても。

黒井千次が△時間△の問題を導入できたのは、右に見たような作家や批評家たちのたたかいの土台に依存できたからである。その光のもとで、「時間」の主人公は、△自己の現在を、自己の過去の眼でまざまざと見てとる△ことができるような「二種類の時間」を自己の転換の核心に据えて考察しえたのである。卒業後十数年して出席した「寺島ゼミナルコンパ」で、彼は若い学生と一サラリーマンとなった自分の差異を△変質なのか、一つの成長なのか△と問うてみる。彼の現実と学生に対する違和感や嘔吐感はある幻影をよびおこした。「その時、一人の男が、ふっと部屋を出ていくのを彼は見た。古びた浅黄色のレインコートをつけた痩せた後姿が廊下の明りの中に鋭く浮かび、すぐ襖の陰に見えなくなった。」この形

象の狙うものは解りやすいだろう。彼らはある原点、あるいは理想とか理念で自分たちの現在と生活を測定せざるをえない。

「教授は、物理的な外庄によって変れないのではない。おそらく、自己の学と結びついた、いわば内庄によって変れないのである。それならば、我我は何の原理によって変るのか。物理的な外庄によって変るのだ。しかし、真に外庄のみによってか。自己の内部に、滑らかに流れていく時間の方向に沿って飛び込もうとする衝動はないか。いつの間にか出来あがった生活の外皮を傷つけまいとする本能的な配慮がうごめいてはいないか。」

この反省はあまりにも常識的にみえる。ここに権力、天皇、マルクス主義、党などを当てはめてみれば、ほぼ古典的な転向のスタイルと区別しがたいものだといえる。主人公のうける課長資格試験は会社組織の体制内にくみこまれることだし、あの△可能性の誘惑△の範疇にあるだろう。

主人公に考察を強いたもう一つの非転向軸、あるいは倫理的側面は三浦という二七年血のメーデーの被告に具現されていた。三浦は法廷で十五年間という時間について告発した。「被告、私には、何が残るか。たとえば裁判を通じて真理が現れ、私の無罪が明らかにされたとしても、私から奪われてしまった時間はもはやもどらぬではないか。」彼は確かに被告として十五年間変ることは許されていない。だが、被告として変らないことは、十五年前の一点に彼が停止していて、権力に対峙していることに違いないとしても、彼の思考や現実認識が豊かになつたかどうか不明なのである。主人公にきわめて倫理的に思われた三浦の生き方が、はたして何を生みだし

えたかどうか検討しなければならぬのである。

すでに素描したごとく、戦前型転向にあつては、天皇制あるいは国体（政体）、私有財産制度、資本制的生産手段などを変革するためのイデオロギイや党に対する忠誠心、宗教に近い信仰心をもつ場合があつたため、常に倫理的、道徳的であり、転向の痛みはレーニンの鉄の規律との距離で内面化された例が多いだろう。昭和十八年発行の「思想犯保護対象者に関する諸調査」（『転向』所載）の転向の動機を見ても、共産主義者の場合、国民的自覚、家庭関係、理論的矛盾の発見、拘禁に因る後悔、身上関係、その他の原因、信仰上の順番になつていて、転向動機の内容はよく検討され直さねばならぬとしても、一般的な動向がどういうものかよく示している。そして、多くの転向をあつかった小説が語っているのは、あるいは語らないことによつて暗示しているのは、拘禁や党からの離脱において変つてきた内面の機微であることなど断わるまでもない。そこに介入し、大きな力をふるつたのが、過激社会運動取締法案（審議未了）にはじまり、治安維持法の制定にいたる権力側の抑圧体制の整備であることも注意するまでもない。

「時間」の主人公の非転向軸に対する負目は、自分の内面の醜悪さにどれだけ堪えうるかという倫理的要素の強いものであつたが、その変貌の要因の一つはつぎのようなものであつた。「このまだ新しい裁判所の建造物、建築中の高層ビル群、街路を走り続ける自動車、豊かな消費物資、景気調整、国際収支の改善、低開発国への数々の援助」に端的に集約されている高度経済成長下の「産業の場」での自己、家庭生活における自己の凝視にかかわるものであつた。

だから、彼は三浦のものでない、自分の十五年間を真剣に考えはじめねばならなかったのである。「それは寺島ゼミナールにおける日本経済の高度成長の投影図」を正面にすえて批判することである。彼は「寺島ゼミ」そのものが、現在ではすでに彼等のもったあの質量感溢れる入過去Vを持ち得なくなっているのか。それがわが高度経済成長の実態なのか」と自問すると同時に、「日本列島。諸君に頼みますよ」と叫ぶ寺島に対する思いに示されている。「そこがすでに居るべき場所ではなくなっていることを彼は激しく感じとっていた」ゆえに、彼は高度経済成長下における新しい人間的感受性と思想を生みだす必要性を認識し、また寺島に象徴される旧左翼マルクス主義経済学者の現実認識の拒否をつらぬかねばならぬと感づいたはずなのである。磯田光一が野間宏の『暗い絵』の投影をよみとつたのは至当であって、いわば思想的、論理的、現実的にも機能しなくなった古典マルクス主義、あるいは進歩主義ではなく、また高度経済成長下の産業社会への埋没でもない、かの入日本の心の尖端Vであろうとし、入仕方のない正しさVではないものの探索へと旅立ちとうとした主人公のかすかな意志がうかがわれるのである。入俺はもう一度、俺自身の底からくぐり出なければならぬVと考えた深見進介と相似の心性はつぎの一節によく示されている。

「後ろから追うのではない。前からめぐり会ふのだ。いつか――。過去と現在とのつながりに悩むこと自体によって重い問いかけからの免罪符を得ようとするのではなく、現在そのものを充たす自らの労働の中を突き抜けて、俺が何かを確かめることのできたその日に。俺は、俺のレポートを守り抜くだろう。俺のレポートを

守り抜く俺自身を、俺は守りとおすだろう。そのために、俺は課長にもなるだろう。あの後姿に照していえば、その変化は、卑しく、醜いものであるのかも知れぬ。無駄な、愚かな、さらには誤った努力であるのかも知れぬ。しかし、その危険な道を歩むことの他に、俺にとってどのような道があるというのか。思い出にみられた入過去Vの葬儀は終わった。空疎な入現在Vの祝宴を俺は辞してきた。」

私は前に古典的な転向のスタイルをこの主人公に見たが、この位相でようやく一九六〇年代に特徴的な萌芽を見ることができたのである。そして、ここから『五月巡歴』への道は進められるのだが、それを可能にした鋭い時間意識はのちに吟味することにして、労働のイメージを少し追究していきたいと思う。

黒井千次の労働のイメージは、聖化されていたものが俗化にみまわれ、その俗のうちには本質的なあるものの輝きを認知する過程の形象にある。「聖産業週間」の田口運平は、ある日「突然の変化」をみせて、仕事を愛するのだ、と宣言する。仕事への愛は、信仰に類するものなのか、狂気の発作なのか他人にはわからない。彼の仕事に急激に驚異的に進捗しはじめ、この猛烈な労働は同僚たちに、一種の「不当労働行為」を強いるまでにいたった。語り手の「私」が偶然覗いた運平のノートにはつぎのような記述がある。

「思えば、私は常に、最もそう在りたいものの傍らに、立ち続けていたような気がするのである。その生の瞬間における、方向感覚すらも定かではない何事かへの熱中に身を投ずることなく、常に瞬間を相対化し、時間を手段とすることによって生きて来たよう

に思われるのである。子供の時は少年になる為に、少年の時にはより上級の学校に進む為に、そしてささやかな政治運動に参加した時には学問と運動の両者の中間にいずれとも決め難く。そして結局大学の後半は就職のために存在し、今は？」

彼のもとするものは、今、ここに在ることの意味、自分の生を充実させる労働、聖なるなにかなのである。それはもともと本質的なものであり、未来へ架橋する鍵である。彼はこの熱中を方法とする実験に賭け、何かに、何処かに到り着くべき運動を「聖産業週間」と名づけて、実践しはじめたのである。傍観者、あるいは事物の本質から遠くにいる彼は、「人間の意識がまだ草のように健やかで、石のように強固であった時代における労働のイメージ」をいだいていたので、手ごたえ確かな労働を自ら体現しようと狂信的熱中においていりつづけた。けれども、彼が認識したことは、「労働と生活との分裂、あるいは均衡の失墜」であって、瑞々しい原始の楽園、ユートピアは永遠に失われていたことなのである。彼は労働の喜びや生きている歓喜も体験することができなかつた。彼は種をまき、育てあげ、収穫する単純明快な労働から遠ざけられ、近代資本制的生産労働の疎外状況を痛々しいまでに味わいつくさねばならなかつたのである。つまり、彼は労働へ没入できないこと、自分が今、ここにこうして在ることを知り得ないことなどを直覚することにより、逆説的に現在の彼と現実世界のありようを示唆したのである。彼は聖なるものから遠ざけられた。俗なるものからも同様に。彼は「短い旅から帰って来た」が、行き場はない。では、どうすべきか。語り手はいう、「今、ぼく等は貴方のようにして、長い長い旅に出か

けるところなのだ。その行末は、ぼく等の誰にも、まだ、わかりはしないのだが——」と。

目標も解らない旅、あるいは未知の闇への手探りは、「穴と空」でも表現されている。

会社を欠勤して穴掘りに熱中しはじめた社員がいて、彼の様子を見に来た二人の同僚を穴掘りにまきこむ。最初はこの仕事に懐疑的であった者を、徐々に充実した労働だと錯覚させる力がその仕事にはあった。したがって、この労働は体内からじわじわと湧きあがる喜ばしい歌だと思いなされた。「土は、ためらわずにぼくの力と技術を示してくれる。やがて、ゆっくりと一つのリズムがぼくと土との間に生れてくる。掘っているのではなく歌っているのだ。」掘られた穴の世界は、田口運平の夢みた健やかで強固な労働でみちていた。一種のユートピアが実現されていたといってもよい。というのも、「この穴の中には、動詞しかないんだ。掘る、すくう、運ぶ、削る、掘る、寝る、掘る、運ぶ、食う、掘る、掘る」という単純で確乎たる行為で充たされていたからである。また、「一定の目標を持った作業のピッチがあがってくる等といったものは全く無縁の、作業と人間とのつながりそのものの濃度の緊密化」が実現されていたからでもある。意味づけされなく、価値評価されなくてもそれ自身のうちに価値や意味が輝きだしているような労働なのであった。いっさいの装飾がはぎとられて、労働のみが屹立していた。にもかかわらず、この穴はもともとゴミを埋めるために掘りはじめられたものだから、突然、歌や祈りに通ずる神聖で素朴な労働に従事していた彼らの頭上から、「凄まじい量の厨芥」が地すべ

りのごとく落下してきたのも当然だったといえるだろう。いわば、 \wedge 聖 \vee なる穴での \wedge 聖 \vee なる労働は、汚辱にまみれた日常的次元に一挙に転落させられてしまった。それは \wedge 俗 \vee 世界における有用なものであり、一機能であった。讃えられるべき熱中は、突然日常性によって水をかけられたのである。

このような理想と現実、聖と俗の乖離の表現のうちに、私たちは黒井千次のニヒリズムを見るべきであろうか。あるいは、無力さの表白をよみとるべきだろうか。

彼は労働に付与した聖性とその剝奪の過程を、ある時間意識によって対象化したというべきだろう。作中人物たちが労働や仕事にうつつけたイメージの原型は、原始共同体の農耕的な単純労働であったのだから、そこからあぶりだされるのは、一種の楽園、夢、理想的な空間なのであった。彼らにとって、現実の不満や欠如や空白の思いなどは、思考の中で整合性をもたされなければならなかった。その欠如や空白を埋めるべく、実践的衝動が彼らの内部をつき動かしたのである。この時、原始時代と現代とが等価性を付与されつつ往復・交換されることによって、一つの空間へとせりあがってきたのである。

けれども、夢の行為への転化は、感覚や肉体の次元できびしい違和感を喚起する。美化、聖化されたものは、泥まみれになるのである。それによって、彼らの内部で、時間意識が決定的な \wedge 転換 \vee を味わうのである。つまり、ここに \wedge ずれ \vee が生ずる。このかすかな \wedge ずれ \vee が、目標も定かでない旅、未知の間、失われた楽園世界、聖化された空間などへの歩みをいざなうのである。彼らは、いわば

一種のニヒリズムの底から歩みはじめたのである。そのニヒリズムの深さは、時代の影響をうけて、それほど深いものだといえないにしても――。

時間意識のありようや労働のイメージをある程度解き明かしたことによって、『五月巡歴』を一つの方向性に於て照示することができる。主人公・館野杉人は、大学時代の友人で二七年メーデー事件の被告・網島陸夫から法廷での証人を依頼されることで、二〇年間ほどの時間を反芻し、その意味を考えはじめなければならなくなった。「身体の奥に過ぎた日の影をひきつつ重くめぐれて来るものがあるのを十分に知りながら、杉人はつとめてそれを無視しようとした。証人に立つのは、過去の出来事を生きるためではなく、今日を過すことにより多くかかわっていると思ったからだ。」彼は古いノートを探しだし、過去を一つの客体と見ようと試みた。だが、ノートの記述は、客観的な事実の経過をうかびあがらせるものではなくて、「断片的な光景と気分の記録」でしかないと解った。二〇年近く沈澱しつづけた時間は、現在の彼の記憶と齟齬し、彼の自己認識をゆり動かした。堆積した \wedge 事実 \vee は、二〇年ほどの時間の生成のきびしい諸相を彼につきつけたのである。また、他者との関係に於て、彼は自分の姿がプリズムを通してみた像のように歪み変形させられているのを知った。もし時間の視線という比喩が許されるならば、時間の視線は人々のそれと同じように個人の姿を変形させるのである。

大学生時代の恋人で旧姓花村、現在薬師寺悦子との関係ならば、つぎのように記述されることになる。

「今や花村悦子という人物は存在しないのだ。だから、杉人は薬師寺悦子と花村悦子の間に引き裂かれるようにして立っていなければならなかった。そのあたりには幾つも幾つもの五月が降り積もり重なりあっているようだった。過ぎ去った熱い五月の上に、振り向かれた五月、恐れられた五月、歌われた五月、捨て去られた五月、戻って来た五月、欺かれた五月、盗まれた五月、沈黙の五月、雨の五月、破られた五月、花の五月、売られた五月、死にかけた五月……。そんな五月を掻き分け、かいくぐって生きていくのに、杉人には花村悦子が必要であり、更には薬師寺悦子さえ必要なかもしれない。」

悦子と五月のさまざまな過去のイメージが堆積され、現在の諸事実やイメージとの間で引き裂かれる。過去は時間の自己要請によって再生されることで、現在に乱反射しつつ侵入し、時間が重層化されると同時に自己と現実も重層化されるのである。彼が現在の自分と現実世界を追尋しなければならぬ理由もここにひそんでいる。つまり、彼の家族たちとの日常生活、前田森子との愛人関係、五十嵐郷子などの御用組合批判の動きへのかかわりなどすべての現在の生活と思考が、あのメーデーにまつわる記憶のまわりに関係づけられるのである。過去は容易に再生されない。現実の闇は深い。歴史と時間の連続性を断ちきられた二つの時間が、杉人の内部にきしみながらぎくしゃくと共存させられるのである。

これらは、非意志的記憶と呼ばれるものを想起させ、杉人の内部における非意志的記憶と意志的な記憶の交換・合流の様相を垣間みさせるだろう。曖昧なものが明晰なものへ、あるいはその逆。不定

形なものが鮮明で輪郭のはっきりしたものへ、あるいはその逆。これらが知覚と意識のうちで、目覚めたり消失したりする構造を知ることができるのである。だからこそ、彼の願望はつぎのようなものとなる。「一九五二年からの時間のすべてを杉人は自分の腕に抱きたいと思った。その前がなにもなく、その後だけに伸びて行く、時の形をした不思議な身体を彼は隅々まで確かめてみたかった。」これは単に郷子の肉体を指すに止まらない。時間がつくりあげ、空間性を獲得することによって時間が後景にしりぞいた状態、あるいは空間がつくりだされ、時間が刻みこまれることによって空間性が稀薄になった状態を確認する欲求だといえることができる。だから、彼はその失われた時間を回復するために「つなげる時間」を追いかつめるのだが、時間が増加するにつれて空間も増加するので、収拾できなくなってしまうのである。八時の鎖は切れながらつづき、つづきながら切れている。

彼がしたがって息子たちに「為来りの形だけでも一度は教えておいてやろうと思」うのも、こうしたモチーフから考えると、時間を固定して空間性を獲得した八慣習あるいは制度に依存する楽な状態への思いをふと吐露せざるをえない、一種の精神的な窮境を語っているともみなすことができる。つまり、人間世界では何がいつ起るか解らない。だが、全努力を傾けてそれに対処しなければならぬのであって、彼にこの思いを加速させたのが、証人依頼の突然の手紙であった。二〇年ほどの時間の幅を一举にとりこまねばならぬような事態が起るのを、彼が身にしてみても知ったからにはかならないのである。

この作品を八転向Vの側面と交錯させるとどうなるか。杉人の友人・谷村は、六〇年安保闘争をきっかけに、自らの思想的立場を尖鋭にした。彼は『六〇年安保があった。あの闘争をみていて、俺ははっきり感じたんだ。』『なにを？』『政党って奴についてな。闘わないとか闘うとかいうことについてな。』と自らの現実認識を語った。

「説明はなかったが、ただ過去を語っていた時と異るどこか歪んだ声の響きから、彼の思想的立場がメーデー当時とはやや異っているらしいことが察せられた。彼の当時属していた政党が巨大化しつつ右旋廻したのか、または彼が踵で立ってキリキリと身を揉みながら左旋廻したのか。いずれにしても谷村の変容は杉人が別のところでよく出会う大学卒業以来の大方の変容とは逆のベクトルを示しているようで杉人を驚かせた。この男がどんな経緯である繊維メーカーに就職し、その経理部門での日々を過しているのかを想像すると杉人はなにか重い気持ちにならざるを得なかった。お前の部屋に窓はあいているか、机の上に空気は来るか、ときいてみずにはいられない気持ちだったのだ。」

時間に内在する変質作用が、ある強固な意志によって速められている例が見出せるだろう。「転向」という観点からすれば、共産党とその組織成員を非転向軸にすると、谷村は「闘う」立場を選ぶことによって「転向」したのであり、谷村を軸にすると、「政党が巨大化しつつ右旋廻」することによって、共産党とその組織成員が「転向」したのである。

谷村の選択には、彼の感覚、倫理、論理、世界観がすべて賭けら

れたに違いない。また、彼の現実認識がすべてたたきこまれていたはずである。それゆえに、彼は「転向」せざるを得なかったのである。彼の八闘いVの内容とその実体は明示されていないが、ある程度想定できるだろう。スターリン批判前後からの埴谷雄高や吉本隆明たちの思想的なとなみ、たとえば埴谷雄高の「永久革命者の悲哀」、吉本隆明の「芸術的抵抗と挫折」などに象徴される文学的表現は、安保闘争の思想的総括として『民主主義の神話』一卷を生みだすだろう。その書物から論題のみをかきうつしてみただけでも、ほぼその目指された方向が髣髴させられるにちがいない。「定型の超克」(谷川雁)、「擬制の終焉」(吉本隆明)、「自己権力への幻想」(埴谷雄高)、「六月行動の政治と文学」(森本和夫)、「民主主義と暴力と前衛」(梅本克己)、「党物神崇拜の崩壊」(黒田寛一)の諸編である。

おそらく、谷村の「転向」とは、右に列挙したような営為への接近を意味した。このとき、古典的な「転向」は成立しない。基準となるべき軸が想定できないのだから。また、国際共産主義運動も国内の左翼運動も判断の基軸とならないのだから、マルクス主義というイデオロギイしか基準となりえなくなる。あるいは、理念。けれども、イデオロギイとか歴史とかを判断基準とするといっても、私たちは立所に相対主義と絶対主義の泥沼におちいつてしまわずである。マルクス主義は、その物の見方や考え方、現実や歴史の認識の仕方、人間論や世界観において卓抜したものであるが、宗教的な絶対教義ではないのだから、時間的・空間的に相対化されるものであることは断わるまでもない。ところで重要なことは、現在も、支

配・被支配の関係、資本制的生産様式にまつわる賃労働や商品をはじめとする諸問題は現実的に止揚されていないし、私たちの生から存在にわたって、自由はまだまだ十分に実現されていないということなのである。問題がときがたい理由も、これらを有機的に結びつけつつ、私たちの生のありようから存在、宇宙にわたって目を注ぎつづけなければならぬからである。極微なものによって極限のものとは類推しつくせないし、また究極のものから始源を類推しつくせないからでもある。

転向の不可能性とよんだ内容の一面は、右の見解に幾分示されているが、私たちは個人の認識と実践をうながす内的な構造や、時間と空間の関係、人間存在と存在とのありようなどを解明することなしには、転向の不可能性について口ごもらざるをえないだろう。これらはなされねばならぬ考察だが、今、この論の枠組をはみだす問いかけである。ここで確認すべきことは、文学と思想のありようを考える際、「転向」の概念を一補助線として導入するとすれば、新しい入転向Vの概念を創りださねばならぬということである。私はさまざまな作家や批評家の文学と思想のいとなみを批評する線上にある考えを創りだしたいと思っている。或る発想と考えはあるけれども、転向はある、にもかかわらず転向は不可能だという逆説を私はまだ当分生きていくつもりである。

黒井千次の数作品を分析したかぎりでも、「転向」論の一分水嶺に到り着きえたといえるはずである。『群棲』をあえて素描しなかつたけれども、冒頭にのべた見解をいいかえれば、この作品は、現代の人間と関係意識、あるいは核家族がさらに個々人に分解し、個

人がさらに精神と肉体の分化・乖離現象を呈している、一種の徹底的な解体を描出しえているであろう。それは共同体をもむしばんでいる。ここには有効な理念も幻想もないのだから、個人は裸身でもってきびしい時間と空間の凝視に堪えねばならぬ。だからこそ、時間の問題や理念の問題がある程度考察の助けとなった「時間」や『五月巡歴』と『群棲』の内的距離は大きいのである。いやいっそのこと、異質な文学空間が開かれているといたいほどなのである。

ともあれ、黒井千次の諸作品は、現代人の生活と生そのものあり方を深い次元から解き明かそうとした努力の結晶にほかならないのである。この稿ではおもに「転向」の問題を時間の問題とからめて少しく論じてみたにすぎない。一九五〇年代後半から、「転向」の問題は多様で多元的な要素を孕みはじめたのだから、より多角的に論じられる必要があるはずである。そのとば口によく一歩足を踏み入れたというべきか。

最後に私は比喩的に語りた。司馬遷は『史記』で、国をうしなつた孔子を鄭人の言葉に仮託して「喪家の狗」(喪中の家の犬、あるいは宿なし犬)と形容した。思うに、政治を否定し、世界を批判し、文学に於て文学を揚棄しようとする者は、「喪家の犬」でなければならぬ。彼はきびしい文学的、思想的彷徨のうちで、新しい立脚点を模索しつづけねばならない。到達したと思えば、また遠ざかるにちがいない文学の、方法の、思想の、生活の立脚点を。それらは、過去にあった理想的なもの、確固たるものへ再建Vではなくて、絶えず新たに生みだされて未来へと架橋されるようなめざましい入創出Vでなければならぬのである。

(文学部教授)